

# 「オルタ面接」

作 F O ペレイラ 宏 一 朗

くり返される面接の果てで対面するの。

登場人物

面接官 面接官の台詞はすべて録音音声

男 生身の人間が演じる。スーツ姿。

暗転。

面接官 それでは面接を開始します。

開幕のブザーが鳴る。

ラジカセを担いだ男が一人いる。他には誰もいない。

男

今まで、これといった仕事はしてきませんでした。なぜなら、無意味だと思ったからです。「人はいつか死に、いつか失われる。誰かを愛した過去も、誰かに愛される未来も。」すべて、これまで何十億年の間、生物たちが紡いできた事実です。しかし、我々はその上に本当に立っているのでしょうか？いいえ。過去は過去という概念が生まれてから、既に失われたものとして認識されなくなってしまった。つまり、「今いる我々も、いつかは失われる。」あなたの哀しみもわかります。私自身、今まで考えてもみませんでした。いつかは自分も死ぬだなんて。この退屈な日常がいつまでも続くのだろうと。宇宙人でも来ればいいのに、なんて考えたことがあります。……もともと勉強が得意な方でもなかったですし、幸せな人生だったかと言うと、首は縦に振ることなど叶わない。けれど、自分自身という人間がいればいつかは一発逆転できるんじゃないかと、そう思っていたんです。たった一つの過ちが人生を狂わせることがある、とはよく言いますが、まさかこれほどまでに、つらく、苦しい仕打ちを受けるなんて。この世界はいつたいていどうなってしまうのでしょうか？！

面接官

あの、少し黙っててもらえますか。あなたの万引きの調書が進まないのです。

間。

面接官

えー、三十二歳フリーターね。まあ平日のこんな時間にブラブラしてるようではそうか。こういうのは初めてですか？

男

ブラブラしているわけではなく、私はこの世界すべてに存在している可能性を探していたんです。宇宙人を倒せる可能性を。それが、たった一つの過ちのせいと……。

面接官

はじめてつてことにしときますね。あのね。万引きは犯罪ですよ。なんでこんなことしたの。私はその商品に宇宙人を倒せる可能性を見出し、来るべきとき、来るべき場所で使えるように改造しようと思って回収しただけです。それがなぜこんなことに。

面接官

お金を払わなかったからですよ。

男

金！金という概念がそもそも何もかもを狂わせているんだ！僕はそんな資本主義社会が許せ

ない！だから僕は、金を持っていない！故に、支払わずに出たのだ！

面接官 世の中ではそれを万引きって言うんですよ。っていうかラジオでどうやって宇宙人を倒すんですか。

男 今あなたがいるのは、たまたま人間という知性のある生物に生まれただけで、所詮一生命です。生きていくだけで、死ぬばああなたなんていなくなるんです。しかし物は自覚している。われわれは物以下なんでしょうか！？

面接官 はい勝手に意味のわからない質問はしないでくださいね。

男 ……この世界は、平等じゃないんです。なぜなら、宇宙という存在自体が不確かであり、常になんらかの事象を生み出しているのです。膨張、縮小、時間経過。すべては通り過ぎては離れていく。現れては消えていくんです。だから、僕自体その枠組みでは図ることとができません。通り過ぎては消えていく。当然ですね。肉体はいつかは滅んでしまうのですから。しかし、それは平等ではなく、あくまでもまだ宇宙の過程の一部なわけです。つまり、何か予測不可能なことが起こると、それすらも宇宙の変化である。このレイディオも宇宙の一部であり、それが 僕のカバンに入って持ち帰られて消えてなくなるのも宇宙の一部であるというわけです。

面接官 とりあえず店長呼びますね。

男 待つてください！…すべてを受け入れる心を持つべきです。

面接官 ですが、その理論でいくと、それを捕まえる私の仕事というのも宇宙の一部であると思うんです。

男 どうしてそうやって形式的なことばかりを考えてしまうのですか。いいですか、すべては形式ではなく、流れなんです。僕が万引きをして、それを捕まえないという宇宙の流れなんです。

面接官 とりあえず警察呼びますね。

男 店長はどうなったんですか！まずは店長とも話をするんじゃないんですか？

面接官 だってあなたが店長を呼ぶなって。

男 だからって警察は店長というプロセスを飛ばしてしまっているでしょう！いいですか、宇宙が存在して、素粒子が生まれて、あらゆる星が生まれたんです。プロセスがないと急に星は生まれません。星を呼ばないでください！

面接官 警察的に言うと星はあなたなんですけどね。

男 頭に来た。実家に帰らせてもらいます。

男、立ち上がる。

しかしあることに気づく。

男 ……店長さん！？

架空の店長が存在している。

面接官 らちが明かないので先に呼んでいました。

男 ……あなた、お強いですね。

男、椅子に座る。

面接官 まあ規則なので。

間。

男、深いため息。

男、おもむろにジャケットの内ポケットから新品の煙草を取り出し口にくわえる。

面接官 あ、すいません、ここ禁煙です。

男、煙草を啜っていたが降ろし、また深いため息。

面接官 とりあえず名前前から聞きましようか。

男 ○○○○（演じている俳優の本名）です。

面接官 本名ですか？

男 失礼な。本名ですよ。正真正銘の。

面接官 本名は？

少しの間。

男・・・ビタリ・シュビドコイです。

面接官 シュビドコイさんね。何人？

男 キルギスです。

面接官 へー。キルギスですか。そうは見えませんか。

男 国や人種なんて関係ありません。たとえ私が不法入国者であろうと、

面接官 不法入国者なんですか？

男 たとえばですよ！あくまでたとえです！なぜあなたはすべての物事にそうやって疑いをかけるのですか！

面接官 あなたがそんなことをおっしゃるからです。とりあえず今回のことは警察に任せますから、警察はだめです！いいんですか、一家電量販店のアルバイトであるあなたが一人の人間を国家権力にさしだすなんて、あなたも国家の犬ということになりますよ。国家の犬に成り下がってはいけません！店長さんもほらなんとか言ってくください！

面接官 無駄ですよ。店長はしゃべりませんから。

男・・・許すまじ。許せませんよ、あなた。

面接官 シュビドコイさん落ちついて。

男 ここに姿を現せ！殺してやる！いや、もうそんなレベルではない、細胞的に崩壊させてやる！

面接官 （途端に芝居が下手になって）た、助けてえー！

男 はいストップ。

男、手を叩く。

男 以上を持ちまして面接を終わります。

面接官 ありがとうございます。

男 だめですよ、最後の最後で態度を崩してしまっは。

面接官 すいません、なんか圧倒されてしまっは。

男 せっかくの対キルギス人万引き対策評価面接なんですから、もう少しがんばってもらわないと。実際のキルギス人はこれよりも泣き落としや逆切れなど、さらに悪質な手を使って我々の良心をも揺さぶってきます。そのあたりも注意しないと。簡単に万引きされてしまいますよ。

男、煙草を取り出し火をつけて吸う。

男 あ、あと、この煙草も万引きしたものですからね。ちゃんと注意しないと。

面接官 すいません。しかし、うちは家電量販店なのでたばこは置いてないんですよ。

男 こちら側の予測不可能なことだっはキルギス人は平気で行うんです。店に置いてない物だっは万引きする、それがキルギス人です。向こうの更に上を行かないと、こんな家電量販店単につぶされるんですからね。とにかく、来週再び行います対ウガンダ人万引き対策評価面接の再試験では、もっは頑張っはくださいね。では、今回の面接は以上ということで。

面接官 ありがとうございます。

面接官、手を叩く。

面接官 はいオッケーです。

男、鋭いため息。

面接官 え、本当にお芝居はじめてですか？

男 はい。今までずっは部活ばっかりでしたから。

面接官 いやあ、いいなあ。よかったですよ。

男 いきなり台本を渡されて審査するなんて言われたので、上手くできなかったらどうしようかと思っはたんですが、結構入り込めました。憑依？っはいうんですかね。対キルギス人万引き対策評価面接を行っはいる面接官役なんてそうそうイメージが浮かぶものではないかなと思っはいたのですが。

面接官 まあ多重構造ですからね。でも、演技をしている人の演技、なかなか上手かったですよ。

男 自分としては演技を一度切り上げるところがなかなか難しいなと思っはいたんですが、楽しかったです。でも最初のシーンが結構うまくできたので、あとは勢いに任せるだけかなと。あ、すいません、なんか自画自賛みたいになっはしまっは。

面接官 いえいえ。素晴らしかったです。では、この結果は後日メールにて送らせていただきますね。ありがとうございます。

面接官 あ、では、オーディションのく料金なんですけど。

男 あ、大丈夫です。ちゃんと持っはきてます。

男、なかなか分厚そうな封筒を取り出す。

男 僕、このオーディションにかけてるんです。よろしくお願いします。

面接官 任せてください。きっと、受かりますよ。

男、封筒を目の前に差し出すような体勢になる。

男手を叩く。

そして封筒を投げ捨てる。

男 と、言ったような対キルギス人万引き対策評価面接を行う面接芝居オーディション詐欺が近頃この日本橋近辺のバーなどで多発している。我々としては、このような売れない小劇場俳優を騙すようなやり口は断固として許すことができない。これは名のある劇団を装った詐欺グループの犯行であるからして、演劇界に詳しくない我々はこれから演劇人を装った潜入捜査をしなければいけない。ここにいるみんなには、その先頭を切ってもらおう。みんな、シェイクスピアは読んだか？

面接官たち 生きるべきか死ぬべきか、それが問題だ。

男 チェーホフは読んだか？

面接官たち 私ほかもめ。

男 よろしい。では諸君らの健闘を祈る。必ず奴らを根こそぎ捕まえるんだ。特に演出家ぶっている奴が一番悪い。なので、そのようなものを見つけたらすぐに連絡をするように。では解散。

警官たち、足早に去っていく。

男 ……といった形で今回面接を受けに来ていまして、だからその、実際に受かるといのは…。

面接官 あー。そういうことだったんですね。そういう事情でしたら仕方がないですよ。しかしもつたいないなあ。

男 ありがとうございます。自分は国家公務員でして副業となるものは禁止されていますし。それに、対キルギス人万引き対策評価面接を行う面接芝居オーディション詐欺の捜査中でした。

面接官 わかりました。では、またの機会にということ。

男 でも、オーディションって楽しいですね。最初は緊張して足が震えていたんですけど。

面接官 演劇、やっておられたんですね。  
男 ええ、学生時代ですけど。こういうオーディションとかには行ったことはなかったのですが、結構がつつりと。自分の劇団も立ち上げてさあこれからって時に、親が足を悪くしちゃって。それなら働かないと駄目かなって。

面接官 劇団はどうなつたんですか？

男 ……どうなつたんですかねえ。聞いた話では、何人かは細々と続けてるみたいなんですけど、僕も引け目を感じて見に行くことはしなくって。

面接官 そうなんですか。悲しいですね。

男 いえいえ。では。

面接官 ……。

男 ……あれ？

面接官 お疲れ様でした。

男 ああ、タイミングが少し遅れてたのか。

少しの間。

録音音声からノイズが混じった音が聞こえる。

それは、昔、男が芝居の稽古をしていたときの音声。

面接官 あ、じゃあ、次は居酒屋のシーンにしようよ。そこで、いい役者を取れなかった男が愚痴を

言う。みたいなのだう？

面接官 いいねえ。

男 台本上ではここまでだ。

少しの間。

男 できることなら、巻き戻せたらいいのにな。

男、手を叩く。

カセットテープが巻き戻される。

男 っていう感じで、せつかくいい役者を見つけられたかなって思ったのに、駄目だったんだよ。

カセットテープは止まる。すると、男は一人で二役演じなければいけない。(オルタ56)

男 そうか。それは残念だな。

男 風貌からしてもちょうど力士役が空いてたからやって欲しかったのに。まあ仕方ないよな。

対キルギス人万引き対策評価面接を行う面接芝居オーディション詐欺の捜査中の潜入捜査員なら。

男 もしかしたら俺、そいつのこと、知ってるかもしれない。

男 え？

男 ちようど、俺ぐらいの身長で、俺みたいな顔で、俺みたいな声してて、俺と仕草とか似てなかった？

男 ああ、そういえば……。

男 そいつさ、本当はすごいまい役者なんだよ。けどさ、悲しい理由でさ、俺の前からいなくなつてさ。馬鹿だよなああいつ。警察官になつても芝居して……よかつたなあ……。

男 ……。

男 ……なあ、そいつ、俺のこととか言つてた？なんか。

男 ……。

男 ……なあ。

面接官 (笑いながら) ハイオクケー！いいじゃん、そこなんか、急に湿っぽくなっていいよ。意味わかんなくて面白いよ。

間。

奥より声がする。

声 (面接官と同じ) なあ、そろそろ、いいんじゃないかな。もういいころだと思ふんだ。そんなと

男 ところでジツとしていても、何も変わらないぞ。外の空気でも吸ったらどうだ？  
毎回同じことを言ってる。

声 そういえば、おまえの警察官の友達、今度一周忌なんだろう？それぐらいは行ってやれよ・・・  
また演劇でもやればいいじゃないか。あ、新しい煙草、ドアの前に置いとくから・・・やり  
直すことはできないんだからな。未来を自分で創れよ。

声、遠のいていく。

男、深呼吸。

男、音楽を再生する。

すると、このひとり芝居の最初に行われていた芝居らしきものが始まる。

面接官 面接を開始します。

音楽 ウィリアム・テル 序曲

男、曲に合わせて台詞を発する。

男 面接とは、誰かが誰かを試したり、コミュニケーションを図るときに行われるものである。それは繰り返し行われることによつて、より細分化された真実を見極めることができる。僕は僕自身を面接化することによつてある一つの真実にたどり着いた！時間は取り戻せないこと、未来もいずれ失われること。しかし、そのどれもがまだ真実ではないのだ。いつか必ず、何もかもが取り戻せる瞬間があるはずだ。そう信じて、面接を、繰り返し、繰り返し、しかし、わかっているんだ。心のどこかではわかっているのだけれど、繰り返し、繰り返し、いくつもの時空を行き来することで、僕は自分自身に嘘をつき、芝居を吐き、役を維持できるんです。はい勝手に意味のわからない質問はしないでくださいね。この世界は、平等じゃないんです。なぜなら、宇宙という存在自体が不確かであり、常になんらかの事象を生み出しているのです。膨張、縮小、時間経過。すべては通り過ぎては離れていく。現れては消えていくんです。だから、僕自体その枠組みでは図ることができずに、通り過ぎては消えていく。当然ですね。肉体はいつか滅んでしまうのですから。しかし、それは平等ではなく、あくまでもまだ宇宙の過程の一部なわけです。つまり、何か予測不可能なことが起ころうと、それすらも宇宙の変化である。こう言いたいんです。ハイオクケー！え、本当にお芝居はじめてですか？いえ、こういうオーディションとかには行ったことはなかったのですが、結構がつつりと大切な友達とやっていました。自分の劇団も立ち上げてさあこれからって時に、親が足を悪くしちゃって。それなら働かないと駄目かなって。そう言ったあいつを僕は止めることができなかつた。宇宙がどう動こうと、僕自身の意思で止めればよかつた。それなのに、それなのに僕は！！なんでだ。せめて、巻き戻せたら、このカセットテープのように巻き戻せたら！疲労困憊の中詐欺グループを追っかけて死んでいったあいつを、代わりに演じてやれることだつてできたのに！僕は、芝居が上手いから！

間。

面接官、手を叩く。

面接官 それでは、面接を開始します。

男、声のする方を向き、暗転。

【上演に関して】

- ※ 上演を希望される場合はその旨を「プロトテアトル」までご連絡ください。
- ※ 台詞の変更・追加・削除などは基本的に自由に行っていただいても構いません。
- ※ 稽古場やワークショップでの使用はご連絡不要です。（でもご一報いただけると喜びます…。）

幕。

【 連 絡 先 】

プ ロ ト テ ア ト ル

e-mail: prototheater@gmail.com